



べふっ子の共育

～学校だより・つなぐ11月号 巻頭言として～

令和6年11月1日(金)

発行: 摂津市立別府小学校
校長 田中健一郎

11月19日(火)の参観・懇談会後に、「先生×保護者の対話の時間」を設定しようと考えています。我々教職員だけではなく、保護者の方々から思いや考えをお聞かせいただき、共に別府小学校の子どもたちを育てていきたい。一緒に学校づくりをしていきたい。常々そう考えています。話し合いのテーマは「これから子どもたちのために何ができるだろう」という内容で、我々教職員と参加いただける保護者の皆様にアイデアを出し合えればと思います。かたくなりすぎず、気楽に楽しく、が理想です。

私も長くこの仕事をしていますが、確かに保護者の方と気楽にきさくに話をするのが少なくなりました。行事など様々な場面で出会う方々と子どもの様子から雑談までよく話をしていたように思いますが、今は保護者が参加する行事も参観や学校行事くらいになってしまい、ゆっくりと対話するという機会が本当に少なくなっています。本校ではコロナ禍以前に家庭訪問もなくなり、子どもたちの暮らすご家庭や地域の様子を見ることもなくなっていました。

そうすると、何か困ったことが起きてから、相談事として、が保護者とのはじめましてとなってしまうことが多くなっています。ちょっと顔を知っている、少し話したことがあるという関係だけであっても、やはりお互い話しやすさは変わってきます。そういう意味でも、やはり人間顔を合わせることはとても大切なことなのでしょう。11月の対話の時間が、たくさんの保護者の方と本校の教職員が顔を見ながらつながり合える、そんな機会になれば嬉しいと考えています。

さて、その対話の時間では、ほとんどの保護者の方には聞き慣れないキーワードが出てくると思います。いわゆる教育用語、学校関係用語になります。知らなくても全然話し合いはできますが、この場を借りて少しお伝えしておこうと思います。

「コミュニティスクール(学校運営協議会)」

別府小学校は今年度から「コミュニティスクール」となりました。「コミュニティスクール」とは学校運営協議会という組織体を設置した学校のことです。文部科学省が打ち出した、『学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組み』のことを言いますが、簡単に言えば、学校だけでなく保護者、地域住民と一緒に学校づくりをしましょう、子どもや学校に関わる課題を学校に関わるみんなで解決していきましょう、ということです。

これまでも別府小学校では地域や保護者の代表の方から組織する「学校協議会」を設置していました。ここにはPTA会長や、自治会代表の方、青少年指導員、地域コーディネーター、学識や教員経験のある方・・・などに入っていて、学校や地域の抱える問題について共有し意見をいただき、という会議を年間を通じて行っていました。この「学校協議会」と新しく設置した「学校運営協議会」との違いは何かと言えば、「意見をもらう」だけでなく、「一緒に課題解決に取り組んでもらう」ということになります。そしてこの「一緒に」と言うのは協議会の委員さんだけではなく、別府小学校に関わる保護者・地域の方々にも学校づくりの当事者として広く関わってもらいたいということです。

現在、摂津市では同じようにコミュニティスクールとなった学校が4校(別府小学校、味生小学校、第二中学校、第三中学校)あります。本校でも学校運営協議会の会議を始めてはいますが、正直なところこの仕組みをどのように広げていくかは未知数、まだまだこれからというところです。

学校、そしてそこに通う子どもたちの教育を考える主体は、もちろん我々教職員です。しかし、子どもたちのことに関する全てのことを我々教職員だけで解決したり、抱えることがとても難しくなっています。カスタマーとしてではなくコラボレーターとしての、保護者そして地域の方々のお力を借りて「べふっ子」を多くの大人で育てていきたいと考えています。

「つながり教室」

本校が独自に作った不登校の子どもたちのための教室です。いわゆる校内適応指導教室ですが、私自身は適応指導？という名前に少し違和感を感じているので校内支援ルームと言うようにしています。

保護者の皆様もご存知かと思いますが、日本では現在不登校児童・生徒の数がとても多くなっています。その数およそ30万人。この数字が多いのはわかりますが、今一つピンときませんよね。およその割合で表すと、小学校ではおよそ60人に1人、中学校ではおよそ17人に1人が不登校となる計算。となると中学校1クラスの中には2人は不登校の子がいることになります。こう聞くと、決してどこかよその話ではなく、自分事として身近に考えるべき問題です。

本校でも不登校になってしまう子どもたちが少なからずいました。来れなくなってしまう理由はそれぞれなのですが、それでも連絡を取ったり、家庭訪問をするなどの働きかけをすることで再び学校に来れるようになった子が何人もいました。しかし、これまで通りに教室に入るのはなかなかエネルギーがいること。学校に連れて来ても、教室以外に子どもたちが安心して過ごせる場所に関わる大人も当時はありませんでしたので、私が教頭時代だった頃には職員室の一角に子どもたちを座らせて仕事傍ら子どもたちに関わっていました。

再び子どもたちが学校に来れるようになったことはとっても嬉しいことです。大人がしっかり向き合って関わりと、子どもたちはエネルギーを取り戻して登校できるんだと実感しました。

職員室は大人の目が届くのですが、そこで過ごす子どもたちにとっては間借りしたような、やはり居心地の悪さもあったので、自分たちの部屋を作ろう、と始めたのが「つながり教室」です。もちろん専属の教職員なんていませんでしたから、空き時間の先生をはじめいろいろな大人が関わることで今まで「つながり教室」の運営を続けることができました。現在では、教育委員会から校内支援員や教育活動支援員という役割の先生方を配置いただき、そこで過ごす子どもたちを毎日サポートすることができるようになっています。

「子どもの校内居場所づくり」

昨年そして今年度と、NPO法人COCONIさんにご協力いただいて「校内子どもの居場所づくり」を進めています。「子どもの居場所」というワードを最近よく聞くようになったと思いますが、困りごとを抱えた子どもたちが安心して過ごせる場所を校内に作る、ということが目的です。学校からのお知らせでお伝えしていますように、これまで「対話の時間」を何度も設けてアイデアを話し合ったり、この夏には視聴覚室を改装してフラット化。ハード面は具体的にできあがりました。

あとはソフト面。この「校内居場所」をどのような子どもを対象にした場所にするのか？誰がどのように関わって運営していくことができそうか？ということを考える必要があります。教職員で話し合い、前述した「つながり教室」の位置づけを「教室復帰を目指すための子どもの居場所」としました。新しく作る「校内居場所」はそれとはまた違ったすみ分けをしながら、教職員だけではなく保護者や地域の方々が参加して運営をしていただける、これから先も長く続けていくことができる、そんな場所にできればと考えます。

これらのことについて、来る11月19日(火)参加いただける保護者の皆様と活発な対話ができることを楽しみにしております。参観・懇談会の後ですから15時30分ごろ～17時くらいの時間になりますが、保護者の皆様どうぞご参加ください。一人でも多くの方にご参加いただきたいと思います。子どものこと、学校のことに関心したい、わが子が通う別府小学校を良くしたい、といった言葉をよく聞きます。とても嬉しいことです。その一つのアクションとして、まずはこの機会にご参加をお願いいたします。

今、PTAへの加入率もとても低くなっています。大人のつながりがとても減っています。

でも、他者とつながれる子どもを育てるためには、まずは大人がつながらないと、と思います。

